

価値概念について（三）

——その内容と意義——

山本二三丸

一、価値の通俗的意味
まえがき

二、イギリス古典学派の価値概念

(1) 経済法則のとりえ方

(2) 商品価値の解釈

(3) 古典学派価値概念の特徴と問題点

(イ) その特徴

(ロ) その問題点

三、マルクスによる科学的価値概念の確立

(1) 科学的経済学の基本的視点

(2) 社会存続の根本条件としての人間的労働

(3) 労働の二面性の把握………（以上、本誌第四〇巻三号所載）

(4) 商品の法則——労働の物化と自立化

(5) 価値概念の骨格

価値概念について

- (イ) 価値の実体と価値
 - (ロ) 価値規定
 - (イ) 価値の人間支配……………（以上、第四〇巻四号所載）
 - (6) 価値の結晶としての貨幣の全能
 - (7) 価格形態の特質
 - (8) 労働力の商品化と剰余価値
 - (9) 資本の全一的支配と人間社会の変質
 - (10) 擬制的「価値」による強力的収奪……………（以上、本号所載）
 - 四、価値概念の欠如した「経済理論」の反科学性と階級性……………（以下、次号掲載予定）
 - 五、資本主義社会における価値生産の客観的意義
 - 六、人間および人間社会にとっての人間の労働の一般的絶対的意義
 - 七、社会主義社会における価値生産の全面的廃棄
- 簡単な要約
- あとがき

三 マルクスによる科学的価値概念の確立（つづき）

- (6) 価値の結晶としての貨幣の全能

(一)

労働生産物は、もともと、生産者自身の欲求をみたすものであるからこそ生産されたものですが、たまたま必要以上に多く生産された過剰生産物が他の生産者の過剰生産物と偶然に交換されるということをかきつけとして、限られ

たた範囲での生産物の直接的交換（物々交換）がはじまり、やがて交換に加わる労働生産物・商品の種類と量が増加してくるにしたがって、他のすべての商品の価値を社会的に妥当に示すものとして一般的等価物という特別の社会的性質を与えられた商品が生まれ、そして結局は、一般的等価物という性質を担うのにもっとも適当した自然的形態をそなえた商品がその性質を独占して貨幣商品となり、その貨幣商品となるのが金であるということ、つまり、一口でいって金貨幣の必然性ということは、科学的経済理論の創始者、マルクスによってその主著『資本論』のなかで、とくにその第一巻第一章の第三節と第四節および第二章において、余すところなく精確に説明されているところです。これらの説明そのものの内容は、価値概念の内容と意義とを究明するうえでも、きわめて重要な意味を多々ふくんでいるものですが、しかし、その内容そのものが簡単には論じつくせない重要な論点を少なからずもっているうえに、全体として「貨幣の必然性」の問題は、本論稿の主題そのものに直接緊密なかかわりがあるものとも考えられませんし、むしろこれを別稿において改めて論究するほうが適切ではないかと思えますので、この論稿では、右のマルクスの解明の内容は一応承認ずみの前提としておいて、議論をすすめることにしたいと思います。

以上を「まえおき」として、この(6)の主題の論究にはいるわけですが、そこでまずはじめに、「貨幣の全能」という事実を確認しておかなければならないと思えます。

ほかの商品ともちがって金貨幣は、その自然的形態がそのまま価値を現わすもの、つまり価値の結晶として社会的に文句なしに通用するもの、そして、ほかのすべての商品は自分の価値を金貨幣の一定分量をもって社会的に妥当に示さなければならぬだけでなく、自分の生産した商品をもってそれと交換に他人の生産物・商品を獲得するために、私的生産者はすべて、まずまえもってその生産物・商品を貨幣と交換してその商品の価値が観念的に貨幣で表現

されている価格を現実の貨幣に実現し、そこで得た貨幣をもって改めて自分の必要とする商品を購買しなければならぬことは、誰でもよく知っています。

右によって、金貨幣という物が、その分量に応じて、どんな商品でも、そのどれだけでも、これを買いとり自由にする絶対的な力を与えられていることも、すぐわかります。どんな生活手段も生産手段も、貨幣によって、どれだけでも自由になることができますし、その反対に、貨幣をもっていなければ、どんなにりっぱな人間でも必要な食料も手に入れることはできず、生きてゆくことすら、おぼつかなくなってしまう。

ところで、資本主義社会では、だれでもよく知っているように、人間にとってなんらかの役に立つもの、使用価値あるものは、有形の物であろうと、無形のものであろうと、たちまちある一つの価格をもつ商品となることができますし、またその価格を支払うだけの貨幣を握っていれば、こうしたものは、いくらでも好きなだけ手に入れることができますようになっています。そのものが労働生産物でない場合には、それは価値がまったく欠けているものですが、たとえそれが金額の価格をもって売られるとしても、その価格というのは、労働生産物・商品の価値を貨幣によって社会的に表現したものであるとしての価格本来の實質をまったく欠いているものですから、私は、このような、価値をもたないものが商品としてもつ価格は、内容のない名目だけの価格であり、ありもしない虚偽の、擬制的な (fictiv) 括弧つきの「価値」を表現したものと規定することが妥当ではないかと考えるものです。こうした名目だけの価格についてはつづく「(7)」のなかで、また擬制的な「価値」の果す重大な役割については、後段の「(10)」のなかで、改めて検討することにしたと思います。

右のように、価値が欠けているにもかかわらず、それが人間にとってもっている特別の効用、つまり使用価値のお

かげで、名目だけの価格をもつ商品として売買されるものは、この資本主義社会には、数かぎりなくあります。世俗的な位階勲等などはもちろんのこと、どんな社会的地位も名誉も、それに応じた額の貨幣を積みさえすれば、いくらでも確実に手に入ります。各種名誉職の選挙投票日が近くなると、きまつて「実弾戦」に血眼の運動員が馳せまわったり、「あそこでは一票〇〇円が相場だ」とかいった噂が飛びかたりすることになるのは、周知のところですよ。人間がそなえている才能を十分に伸ばしてすぐれた人物に成れるかどうかは、この社会では、どれだけ多くの金を自由にすることができるとかということできまることになっています。人間に欠くことのできない大切な教育にしても医療にしても、金次第というわけです。金が乏しければ、すぐれた能力をもつりっぱな人でも生きてゆくことすら困難になります。多額の金を積みさえすれば、人間が生きてゆくうえで欠くことのできない土地でも、住宅でも、空間でも、いくらでも独り占めにすることが保証されますが、反対に金の無い人は、土地、住居はおろか、わずかの空間も日光も清浄な空気も、ひとつ残らず、とりあげられてしまいます。一人ひとりの人間の生き方そのものが、貨幣によって始めから終わりまで決定されるばかりではありません。貨幣の額によっては、どんなにすぐれた人間であろうと、またいくら多人数であろうと、これらの人々を思いのままに自由にすることもできません。

ですから、人間の死命を制するこの全能の金をすこしでも手に入れるために、人間は、どんなに非人間的な、破廉恥な行爲も、どんなに卑屈でみじめな態度も、やつてのけなければなりませんし、あらゆる形の詐欺、瞞着、ペテン、奸計、中傷、背任、汚職が、この社会のいたるところで渦巻いているのも、自然の成り行きといわなければなりません。金が無いためにかけがえない生命を自分から絶つことを強いられる人々、金があると思われてただその金ほしさに押しあった強盗に傷つけられたり、殺されたりする人々、——こうした事件の記事が新聞の社会面を賑わす

ことのない日は一日もない有様です。貨幣という死んだ物が、この資本主義社会全体を思いのままに支配し、生きた人間を数限りなく傷つけ、ふみにじり、人々をたがいにたたかいあわせ、正常な人間を歪めて醜悪な人間につくりかえたりして、その全能を高々と誇っているのです。

マルクスは、主著『資本論』第一巻第三章「貨幣または商品流通」のうちの第三節「貨幣」のはじめにおかれた「貨幣蓄蔵」と題されたその「a」のなかで、

「貨幣を見てもなすがそれに転化したのかはわからないのだから、あらゆるものが、商品であろうとなかろうと、貨幣に転化する。すべてのものが売れるものとなり、買えるものとなる。流通は、大きな社会的埒場となり、いっさいのものがそこに投げこまれてはまた貨幣結晶となって出てくる。この錬金術には聖骨でさえ抵抗できないのだから、もっとこわれやすい、人々の取引外にある聖物にいたっては、なおさらである。貨幣では商品のいっさいの質的な相違が消え去っているように、貨幣そのものもまた徹底的な平等派としていっさいの相違を消し去るのである」
（前出、第三巻、邦訳大月版、一七二ページ）

と述べていますが、ここの最後の文章に注（九一）をつけて、その注記のなかで、シェクスピアの『アゼンスのタイモン』の中から、つぎのくだりを引いてそのままかかれています。

「黄金？ 黄色い、キラキラする、貴重な黄金じゃないか？ こいつがこれくらいありや、黒も白に、醜も美に、邪も正に、賤も貴に、老も若に、怯も勇に変えることができる。……神たち！ なんとどうです？ これがこれくらいありや、神官どもだろうが、おそば仕えの御家来だろうと、みんなよそへ引っぱってゆかれてしまいますぞ。まだ大丈夫という病人の頭の下から枕をひっこぬいてゆきますぞ。この黄色い奴めは、信仰を編みさげもすりや

ひきちぎりもする。いまわしい男をありがたい男にもする。白癩病みをも拝ませる。盜賊にも地位や爵や膝や名譽を元老なみに与える。古後家を再嫁させるのもこいつだ。……………やい、うぬ、罰あたりの土くれめ、……………淫売め」

(中央公論社、坪内訳、一三〇—一三二ページ)。

いまから四〇〇年もむかし、資本主義の祖国イギリスに生まれたこの天才的劇作家の眼のなんと鋭くも的確なものであったことでしょうか！ここにえぐりだされていることは、ひとつ残らず、現在の發達した資本主義国日本では、そのまままかりとおっています。いや、たんにそのまままかりとおっているというだけではありません。もっとはるかに醜惡な形で、破廉恥むきだしのままで、日本ばかりでなく、世界のすべての資本主義国で、おっぴらにまかりとおっているではありませんか。「今日世界を動かしているのは経済である」というキャッチ・フレーズをふりまいで広告宣伝に大童の資本主義的企業もあります。だが、この「経済」というのは、あいまいで、きわめて狡い表現です。それは、厳密・正確にいえば、貨幣であり、資本のことを言いかえていただけなのです。今日世界を動かしているもの、地球の隅々にいたるまで、あらゆる人間を支配し隷屬させているものは、貨幣であり、資本である——これが真実なのです。

(二)

四〇〇年もむかしから天才的劇作家によって告発されており、そのときから誰ひとり身にしみて知らない者のない右のような貨幣の全能！貨幣が人類を汚辱の中に溺れさせているというこの嚴然たる事実を、経済学と名づけられる科学がとりあげ、究明することをしないで、なんとしまししょう。マルクスは、はやくからこの事実注目し、かれがうちたてた科学的な理論体系のなかで、貨幣の本質を究明し、これによって貨幣の全能の必然性、その支配の法則

をあますところなく解明することをなしとげたものです。

ところが、「近代理論経済学」という「めざましい」名前の「経済理論」は、どうでしょう？ 誰ひとり知らぬ者のない右のような貨幣の全能について、すべての人間の貨幣への完全な隷属という事実を、正面からとりあげて、これに究明のメスをいれているでしょうか？ とんでもない、究明するどころか、全能の貨幣の人間支配という紛れもない事実をとりあげて、その根拠を明らかにするどころか、この事実そのものを指摘することすら、あえてしようともしていません。相も変わらず、資本主義社会の「正統性」と「永続性」をふりまいて、貨幣と資本のあくことのない支配にとって「有益な」方策をあれこれひねりだし、かつぎまわって、宣伝につとめています。つまり、客観的にみますと、この「学問」は、貨幣と資本との全能をますます拡大強化し、人間の隷属と非人間化をいよいよ深めるのに役立つ「学問」にほかならないものだとということがよくわかります。

四〇〇年もむかしの古典的資本主義国イギリスにおける貨幣の全能ぶり、その人間支配は、いまから見ますと、まだまだ幼稚で牧歌的なものであったといえます。それに比べると、今日の発達した資本主義国での貨幣の全能ぶりとその人間支配は、なんとすさまじくも驚異的な展開をとげていることでしょうか！ もし、文豪シェクスピアが再びこの世に生まれてきて、今日の有様を目撃するならば、彼ははたして、どんな作品を、どんなせりふをもって、つくりあげたでしょうか？ おそらくは、四〇〇年も前のそれにくらべて、はるかに辛辣で徹底的な告発を、誰にもそれとわかるたくみな表現を駆使して、みごとにくりのべたことではないか、と思われまします。そして、それらの告発のなかには、貨幣と資本の全能を弁護し「合理化」することにしか存在の意義の認められない「近代理論経済学」にたいする限りない侮蔑と嘲笑のせりふが、それとわからない形でふくまれることになるのではないのでしょうか？

と申しましても、この文豪の容赦のない筆鋒はあからさまな俗流「経済理論」に向けられるばかりでなく、「マルクス主義」を標榜するカモフラージュされた俗流理論にも、必ず向けられることを計算にいれておかなければなりません。この種の俗流理論の中味は、発達した資本主義国では「自由、平等、民主主義」が保障されているのであるから、勤労人民大衆はブルジョア国会で多数を占めることに専念し、多数を制して国家権力を掌握するように努力しなければならぬ、という主張につきるものです。マルクスもエンゲルスもレーニンも、資本主義国で、「自由、平等、民主主義」が保障されているなどということを唱えたこともなければ、考えたことすらなく、反対に、それは見せかけのものでしかなく、支配しているのはまさしく賃銀奴隷制であるとなつねづねくりかえし強調しているのですから、こうしたことを唱える俗流理論家たちが、自分たち自身を「マルクス主義者」だなどと称しているのは、まさに騙りに類するものと言わなければなりません。

ところで、「自由、平等、民主主義」について言いますと、それはみごとに保障されているといなければなりません。ただし、それは人間さまについての「自由、平等、民主主義」ではまったくなく、まさしく貨幣、つまりお金さまについての「自由、平等、民主主義」にはかからないのです。貨幣は完全に自由で、どんなものでも、好きなかげ動かし、支配することが保障されています。そして、貨幣同士はお互いに完全に平等です。一万円と一万円とは、まったく平等ですし、一万円は百万円の百分の一の権利しか保障されていないという完璧な平等ぶりです。民主的権利についても、まったく同じで、同じ大きさの価値をもつ貨幣はどれも、つねに、どこでもまったく同じだけの民主的権利が保障されています。つまり、貨幣について完全無欠の「自由、平等、民主主義」が保障されているからこそ、貨幣の全能、貨幣への人間の完全な隷属が保障されているのです。貨幣に保障されている「自由、平等、民主

主義」、つまり、貨幣への人間の完全な隷属という事実をごまかし、すりかえて、人間自身の「自由、平等、民主主義」だとして宣伝してまわるとは、いったい、どういう「マルクス主義者」でしょうか？

右のような紛れもないすりかえを執拗かつ精力的に宣伝してまわっているという事実は、客観的にみますと、つぎのような実態を裏書きしているものといえます。つまり、これらの俗流理論家たちは、マルクス『資本論』は自分たちの一手専売であるかのように言いふらしてはいるものの、その内容については、最初の一ページすらまったく理解していないものだということ、価値についてのマルクスの説明は一言半句もわけわからないものだ、ということです。マルクスによって解明された科学的理論を刻苦しく学びとり、商品価値の結晶として貨幣商品が必然的に生まれ、その貨幣が全能者として勤劳人民大衆をひとり残らず苦しめ、傷つけ、とことんまで搾りあげているという事実をはっきりと認識して、こうした貨幣と資本との全能を徹底的に暴露し、これにたいして粘りづよく最後までたたかうことに努めることをしないで、いったい、どこに勤劳人民大衆の解放のための献身的な奮闘があるのでしょうか？

(三)

これまで、私たちは、貨幣の全能という法則的事実について見てきましたが、ここでは、社会を構成する人間すべてが、利殖の奴隷である資本家から無所有の勤劳人民大衆にいたるまで一人残らず、一様に、貨幣によって完全に支配されこれに隷属しているということが問題であったわけです。ところが、商品価値の結晶としての貨幣の出現は、商品生産社会の人間すべてを一樣に支配する全能者をつくりだすばかりでなく、この社会の成員が本来をなえている社会的人間としての資質を奪い去って、一人残らず互いに敵対したたかいあう動物以下の性格の持主につくりかえて

しまうという、まことに驚異的な作用をおよぼすものとなっているのであって、私たちは、この側面に重大な関心を
はらうことがぜひとも肝要であると、私は考えるものです。

貨幣商品が生まれる以前の、未発展の商品生産および商品交換が、私的生産者同士の互いに相手の必要とする労働
生産物を生産し交換しあう直接的交換、いわゆる物々交換であることは、さきに本論稿の「二」において引用されたエ
ンゲルスの中世末期の農民と手工業者との交換にかんする叙述によっても、よく示されています（本誌第四〇巻三号、
一一三—一二四ページ参照）。右の例についてみますと、農民と手工業者とは旧知の間柄であって、お互いに相手の必要
とする生産物をつくり、お互いによく知っている等質等量の人間的労働をふくむ生産物同士を交換しあっています、
ですから、両者の間にはかたい信頼・依存の関係がありますし、いわば、相互に相手方と結んで、労働の分割をして
いることになっています。このような狭い、限られた信頼・依存の関係は、外部からの影響によって攪乱されないか
ぎり、いわば固定したままで、同じ単純再生産が半永久的に保証されているわけです。ところが、貨幣商品が生まれ
て商品交換はすべて貨幣を媒介として行なわれなければならないということになりますと、そこに根本的な変化が生
まれることとなります。これまで農民Aは小麦10kgを生産してこれを手工業者Bの生産した鎌一挺と物々交換してい
たとし、そこに貨幣が入ってきて、Aは小麦10kgを金一〇マルクで売り、その一〇マルクでBから鎌を買い入れると
しますと、生産物・商品のいわば売りと買いとが同時に行なわれる物々交換、つまりW₁—W₂という一つ過程は、二
つの異なった過程、つまりW₁—G（貨幣）と、G—W₂とに分かれることとなります。そこで、まず第一の過程、
W₁—G から見てゆくことにしましょう。

以前には、Aは、ただBと二人の間だけで平均的な労働を、たとえば五労働時間をかけて小麦を10kg生産していた

としますと、両者の間では、小麦10kgは五労働時間の「価値」をもつものとして認められていました。しかし、Aが小麦を市場で売るとなると、その小麦の価値は、その市場に出される小麦全体について、それらの生産に社会的に平均的に要した労働時間によって規定されることとなります。Aは、知らないうちに、また好むと好まざるとにかかわらず、いやおうなしに、小麦商品の生産者全体の競争の中にまぎこまれてしまいますし、小麦価値は、その全体の競争を通じてはじめてきまるものとなり、競争の成り行きは、きまつて小麦価値を低く押し下げた結果をもたらします。そこで、Aの知らないうちに、小麦10kgの価値は、たとえば四労働時間に下がってしまっています。では、小麦生産者全体の競争によってきまつた四労働時間の価値がそのまま販売価格として、たとえば八マルクとして実現するかというと、ことはそう簡単にはゆきません。どれだけの価格で売れるかは、市場での需要と供給との関係で異なりますし、ここでは供給総量と需要総量との関係ばかりでなく、また小麦に類似した使用価値をもつ代替品の競争までもが入ってきて、その販売価格を押し下げる働きをします。ここでは、売り手と買い手とが互いに利益を争ってたたかうばかりでなく、売手同士の間でも自分の生産物・商品をできるだけ有利に、いち早く売りさばいてしまおうという、必死のたたかいも生まれます。生産量は概して——私的計算による無政府的生産のおかげで——必要量を超過しがちですから、ここでも販売価格は価値を下回るのが一般的傾向です。そこで、小麦10kgは三・五マルクにしか売れないということになります。

さて、右のように二重三重のはげしい競争、つまり闘争を経てやっと手に入れた三・五マルクをもってAは鎌を買い入れに市場にやってくるわけですが、Aが鎌の買い入れに自由にできる貨幣はその所持金三・五マルクだけですから、Aはこれをもって必要な鎌を買い入れるために、その売り手とけんめいのたたかいをまじえなければなりません。

ん。Aは、鎌一挺の獲得のために、三・五マルクよりほんのすこしでも、より多く出すか少なく出すか、また、売り手のほうは、鎌一挺とひきかえに三・五マルクより一ペニヒでもより多く握るかより少なくしか握れないか、——双方ともまさに仇敵同様の間柄となつてたたかいあうことになります。

これをみてもよくわかりますように、貨幣が入ってきますと、私的生産者は、いやおうなしに、同じ種類の商品（および類似代替品）の生産者全体の容赦のない競争関係の中に投げこまれてしまいますし、また、自分の商品の買い手とも、自分が必要とする商品の販売者とも、食うか食われるかの必死の闘争の中に入らざるをえないことになっています。つまり、生産、販売から購買にいたるまで、彼は、彼をとりまいてる目に見えない無数の、強力な闘争相手とのたたかきを強いられ、その必死のたたかいを通じて彼個人の私的利益を、すこしでもより多く確保しよう、けんめいの努力をしなければならぬのです。彼が、関係する商品生産者が——売り手であろうと、買い手であろうと——失敗するか損失をうければ、彼にとつては利益となり、他人の利益増大は彼にとつて損失増大につながるものとなります。ですから、この商品生産者の世界では、相互の間での全面的信頼関係というものは、形の上でこそ在るものようですが、一枚皮を剥げば、その下にあるのは根強い相互不信であり、だまし合い、出し抜きあいであり、もつとはつきり言って、やつつけ合いが抜きがたくかくされているものだということがよくわかります。この世界では、自分だけの利益を追求し、相手方すべての損失を期待することなしには、自己の生存を維持することすらむずかしいのです。こうして誰もが、その心の奥底に、抜きがたい個人主義・利己主義の魂を、大なり小なり、秘めていることをよぎなくされているというのは、貨幣が一般的に流通するようになってからのことです。商品生産の発展につれて、この傾向はいよいよ強められていきます。動物の世界でも種属維持のために個体を犠牲にすることが見られま

す。しかし万物の豊長を誇る人間世界では、なんと、他人を傷つけ、そのふところからできるだけ多くの金をまきあげようという、まさに弱肉強食のたたかいが隠然・公然とおこなわれているではありませんか。これはひとえに、全能の貨幣によってひきおこされた必然的な結果です。この貨幣めは、相争い相食むことに追い立てられている人間たちを見て、おそらく、会心の笑みを浮かべているにちがいません。

もし、経済学という学問が、真に「経世済民」の名に値する科学であったならば、この全能の貨幣を完全に廃棄して、真に人間社会の名にふさわしい新たな社会を築きあげる確かな方途を、私たちに明示すべきではないでしょうか？ しかし、その方途は、頭の中からひねり出されるものではなく、やはり現実の事態についての精確な分析を通じて明らかにされている客観的な根拠のあるものでなければならぬと思いますし、なによりもまず、なぜ貨幣の全能が生まれたか、そもそも貨幣はどうして必然的に生まれて人間を支配するようになったかという、それらの必然性を明確に把握することがなによりも大切な先決要件になっていると考えなければなりません。

では、右のような貨幣の必然性とその機能とを正しく解明することをなすとげ、さらにその解明のうえに、この全能の貨幣を全面的に廃棄して真に人間社会の名に値する社会を築きあげるべき方途を、客観的な経済法則の貫徹を正確に突きとめることによって、私たちの前に明示してくれているような、真に科学としての経済学は、はたして、どこに、あるのでしょうか？ いや、私がいまさら申しあげるまでもなく、それはすでにりっぱに築きあげられています。それが、まさしく、マルクス・エンゲルスによってつくりあげられた科学的な理論体系そのものですし、それは不朽の名著『資本論』の中にみごとに展開されているのです。この名著の中には、さきにもふれましたように、貨幣が必然的に生まれてきて人間世界を支配する全能者に成り上ることになったその客観的な根拠とその展開過程につい

ての詳細で正確な説明が与えられているばかりではありません。さらに、決定的に重要なことは、この全能の貨幣が必然的に自己増殖する価値、つまり資本になり、この資本による価値増殖のための生産が不断の成長・発展を通じて、その資本主義社会そのもののなかに、それ自身を廃棄する諸条件をつくりだし、それらをいよいよますます発展させ、成熟させることによって、自分自身の墓穴を確実に用意するということ、つまり、全能の貨幣も資本もその存在を許されないような、きわめて高度の人間社会を築きあげるべき客観的条件として十分な高さの社会的生産力とその変革の唯一の担い手である主体的勢力とが資本そのものの手によって必然的につくりあげられるという、その客観的・歴史的な法則があますところなく、精確に解明されている、ということです。

右に述べましたことは、すでに大方の読者諸君はよく心得ていられることと思しますので、これ以上蛇足を加えることは控えたいと思いますが、ただひとことだけ、つぎの命題を結びとしてかかげておくことが適當ではないかということを申しあげておきたいと思えます。それは、全能の貨幣は、私たちをあくことなく傷つけ、ふみにじり、苦しめることによって、この貨幣そのものを完全に廃棄して真に人間の名に値する人間の生き方を保障するより高い社会を築きあげるべき唯一の正しい方途を的確に指し示している科学的な経済理論を真剣に把握しなければならぬことを私たち人間に教えているばかりでなく、一日も早くこれを把握し、これを理論的武器として、全能の貨幣と資本を完全に廃棄するために力をつくすことを強制してやまないものである、ということです。

(7) 価格形態の特質

(一)

貨幣が生まれるとどの商品も、その価値を一定分量の金貨幣で、 x 個の A 貨幣 = y 個の B 貨幣の如くというように表現しな

ればならなくなること、この場合、 $M \cdot S$ 鈔というものがその商品の価格であるということは、誰でもよく知っています。この価格については、右に示したように一定分量の金で示されたものですから、たとえば、 x 量の A 商品の価格は金 10 グララであるということになります。つまり、価格の大きさは価格としての金量の大きさにほかならないというわけで、価格の大きさをはかる単位、つまり価格の度量単位としては、価格としての金量の大きさをはかる単位、つまり重量の度量単位がつかわれていたものです。しかし、貨幣材料がはじめの銀から金に変わるとか、政治的支配者による貨幣の悪铸とかによって、価格の単位は重量の単位から離れて、ただ価格だけをはかる単位になってしまいました。この価格の単位は、一つの商品生産社会の内部で一般的に通用するものでなければなりませんから、近代国家では必ず国家権力によって法律で定められることになっています。価格の単位の名称としては、日本では円、アメリカではドル、イギリスではポンド、等々となっていますが、これらを見ても、それが価格としての一定分量の金を表わしているものとはわかりませんので、それらは、商品の価値を直接にはかる単位だと思いがふつうで、インフレによってそれがあらわしている内容、つまり金量をすこしづつ——隠密のあいだに——切り下げることがすすめて独占・金融資本のふところをふくれあがらせることに抜け目のないブルジョア政府にとっては、こういう錯覚。「常識」のほうがかえってお詭え向きというわけです。

ところで、価格は、たとえば 10kg の小麦 $= 5\text{g}$ の金または 15 円 というように、商品の価値を社会的に妥当に表現しているものですから、この 10kg の小麦商品と 5g の金、つまり金 15 円とは等価の関係にあるもので、この小麦と貨幣との交換比率を示す指標となっています。とはいっても、ここで注意しなければならないのは、商品の価格は、右のようにその商品と貨幣との交換比率の指標ではありませんが、その反対にその価格が当の商品そのものもあってい

る価値の大きさの指標となることはできないということです。ここには、価格という形態がもっている重要な特質の一つが示されているのです。そこで、まず、これについて、すこしく説明することにしましょう。

価格が商品価値の大きさを示すその指標になるものではないということについては、そこに二つの異なった意味がふくまれていることに注意することが肝要です。といいますのは、価値をもつ商品についてその価値量とはちがった価値量をあらわす価格が生まれるという場合と、価値をもたないものが商品として価格をもつ場合とがあるからです。

第一の場合の例として、さき的小麦商品の価格についてみますと、小麦10kgを生産するのに必要な社会的平均的労働を3時間、金5gの生産に必要な労働量も3時間とすれば、この小麦商品の価格としての金5gまたは金15円がそれ自身もっている価値と小麦商品の価値とは完全に一致しています。よく価値通りの価格とか、価値と価格との一致とか言われるのは、このような関係にある価格を指しています。しかし、小麦商品の生産量が豊作のため需要量を越えるほど大量になったときには、小麦10gは金15円では売れず、販売価格は13円にも、ときには10円にも下がってしまいますし、その反対に需要が供給量にくらべてより大きい場合には、小麦10kgは16円にも、ときとしては18円にも売れます。これらの場合、15円以外の13円、10円、16円、18円、等々は、いずれも3労働時間分の価値とは違った大きさの価値の量をあらわしているわけですから、3労働時間の価値をもつ小麦10kgの価値を正確に表現するものではありませんから、それらはこの小麦10kgの価格としては不適格であり、厳密に言えば価格とは言えないものだと思います。ところが、実はこれらのものは、みなりっぱに小麦10kgの価格であると言わなければならないのです。つまり、価値通りの価格も、価値通りでない価格も、どちらも価格として妥当するものなのです。

では、価値通りでない価格も、なぜ価格として通用するのでしょうか？ たとえば、さきの例で、小麦10kgが10円で売れたとしますと、この金10円は社会的平均的労働2時間分の価値しかふくんでいませんが、それでも小麦10kgの価格だといわなければなりません。なぜならば、この金10円は、小麦商品の価値を社会的に妥当に、つまり文句なく一般に認められる形で、示しているものであるからですし、小麦10kgと金10円とは等しいねうちのものと確認して等置し交換しているからです。このような、価値通りでない価格、つまり価値と価格とのずれし乖離というのは、ちょっと考えるときわめて不自然で不合理なもののように思われますが、実はそうではなく、資本主義社会の商品生産にとっては、むしろなくてはならない必要な条件となっているものなのです。それは、この資本主義社会では、利殖の奴隷である資本家連中がひたすら私利私欲のために、私的計算で、できるだけ大きな剰余価値し利潤を獲得しようと、自分勝手な生産をやっていますので、その生産はきまって社会の必要とする量と食い違うことになりますから、その度毎に価格が上がり下がりして、あとから生産し供給量を必要し需要量に見合ったものに訂正するように働くことになっていくからです。必要な物が必要なだけ生産されるのでなければ人間社会が満足に存続してゆくことがとうていできないことはわかりきったことなのですが、私的所有の支配するこの資本主義社会では、社会的・計画的生産はまったく欠けていて、利殖の奴隷である私的資本家による無政府的生産が支配していますので、生産はいつでも必要し需要と食い違い、そのままでは社会の存続も危うくなってしまうので、価格がその食い違いをあとから直してくれている、というわけです。生産し供給量が少なすぎれば価格は価値を越えて騰貴し、そのためそれだけ余分の儲けを手に入れますので、資本家は生産量をふやすということになります。その結果は必ずふやしすぎになりますので、今度は価格が価値以下に落ちて、生産すれば資本家は損だということで生産を減らすことになるわけ

です。ですから、生産・供給量と必要・需要量との食い違いを価格の変動によって訂正してもらおうといっても、それは事後的に、つまりあとから訂正するということが、言いかえますと、生産が多過ぎたときには少な過ぎが、少な過ぎのあとには多過ぎが来るという具合で、いわばあとから平均してみたとき生産・供給量と必要・需要とがやっと一致するという事になっており、これによって社会が曲りなりにもその必要をみたすことができ、辛うじて存続を保つことができる、ということなのです。こうしてみますと、商品価格がたえず商品価値から離れて変動すること、つまり価値とおりでない価格、価値と価格との不断の不一致ということによってはじめて、資本家の支配する資本主義社会が存続できるものだということがよくわかります。このことを理論的に正確に表現して示してくれているのが、つぎにかかげるマルクスの叙述なのです。⁽⁸⁾

「……価格と価値量との量的な不一致の可能性、または価値量からの価格の偏差の可能性は、価格形態そのものうちにあるのである。このことは、けっして、この形態の欠陥ではなく、むしろ逆に、この形態を、一つの生産様式の、すなわちそこでは原則がただ無原則性の盲目的に作用する平均法則としてのみ貫かれうるような生産様式の、適当な形態にするのである」(前出、第三卷、邦訳大月版、一三六ページ)。

(8) このマルクスの文章を読むまでもなく、私たちの目の前で日々、価値と価格とのずれと価格の不断の変動が生じていることを見れば、むしろ価値と価格との不一致こそ、資本主義社会の法則的現象であることは、誰にでもよくわかります。ところが、どうでしょう、わで国の「マルクス経済学者」をもって自任されている教授先生のうちのかなり多くの方々は、価値が価値に一致することをもって「価格法則の貫徹」と言い、「価格が価値から離れて動くこと」をもって「価格法則の侵害」であると説明されています。こうした「主張」は、それだけで「価値法則」という言葉についての完全な誤解を示しているものですが、なお、価値がいつも価値からずれている事実を照らしてみますと、この方々は、「つねに絶対に貫徹されえない法則」というものを案出されるという独特の思考能力を具えていられることがよくわかります。こうした思考能力によれば、マルク

スの文章を理解することはおろか、それをふみにじるような「理屈」さえ、つくりだされることになります。「近代理論経済学」と称する俗流「理論」を批判してこれと対決するという当然の科学的任務などはどこへやらいつてしまつて、かえつてこれに迎合するといった風潮さえ「マルクス経済学者」の一部に見られるという事実は、やはり、右のような思考能力の盛行と無縁ではないように思われます。

しかし、価格形態の特質として、私たちがもつとも重大な関心をはらわなければならないのは、価値を全くもっていないものが価格をもつということです。これについては節を改めてよく見てみることにしたいと思います。

(二)

私たちは、さきに「(6) 価値の結晶としての貨幣の全能」の中で、金貨幣がたんに物質的富ばかりでなく、無形の社会的地位や名誉、等々にいたるまで、ありとあらゆるものを自由にし、支配することができるといふことを見てきました。つまり、これらすべてのものは、その使用価値に応じた一定分量の貨幣を出しさえすれば、これとひきかえに手に入れることができるわけですから、支払われる代価としての貨幣は、その売り渡されるものの価格であるといふわけです。ここで問題になるのは、その売り渡されるものが価値をもつていて、その価値から価格がずれるといふことではなくて、価値をまったくもっていないものが価格をもつところなのです。つまり価値と価格との量的乖離ではなくて、それらの間の質的矛盾ともいふべきものが問題なのです。

価値をもっていないものといふことになれば、そこには、労働生産物はふくまれないのは当然です。とはいつても、そこには、さきに一例としてあげましたように、種々様々のものがふくまれています。要するに、それを手に入れようと欲する人間にとってそのものがなんらかの効用を、つまり使用価値をもつていさえすれば、そのものは、たとえ労働生産物でもなく、また無形のものであつても、商品として売り買いされるものとなり、したがつてある一定

の価格をもつことになるのです。しかし、社会的地位とか名譽とかいった、いわば無形の、道徳的もしくは精神的な商品は、實際生活においてはきわめて大きな役割と意義をもっていますが、これについては、読者諸君もよく知っていられると思いますし、また決定的な経済的意義を担ったものとも考えられませんが、ここでは一応考慮の外におくことができるかと思えます。私たちとしては、社会的経済的意義をもつものにしばって考察することが当面の課題となりますが、それらはやはり無形のものではなくて、特定の形態をもったもので、社会的富の生産、交換および分配において重要な意義をもつ有形のものがとりあげられなければならないと考えます。

マルクスは、『資本論』第一巻第三章第一節「価値の尺度」のなかで、価格形態について基本的な説明を与えるなかで、右の「価値と価格との質的矛盾」を指摘し、その一例として未開墾地の価格をあげて簡単な説明を加えています（前出、第三卷、邦訳大月版、一三六ページ参照）。この場合、マルクスが未開墾地をあげているのは、それが人間の労働のまったく投下されていない物であるからなのですが、私は、すでに労働が投下されている開墾地であっても、また、さまざまな形で人間の手を加えられた利用しつくされている市街地であっても、やはり同じ性格の価格をもつものとしてとりあげられなければならないと思います。ここで肝心なことは、人間の労働によってつくられた物であっても、そうでない物であっても、それがその所有者にとってある一定の経済的利益を、しかも、労働生産物の場合にはその物を生産するに要した労働量、つまりそれ自身の価値とはかかわりなく、その物がその所有者に生みだして与える経済的利用効果によってその価格がきまるといふ物は、すべてこの種の価格を、つまり価値とはかかわりのない、むしろ価値がないにもかかわらず価値があるもののようにしてある一定の価格をもつことになり、その価格において売られることによって、今度はそれだけの大きさの現実の価値結晶、つまり貨幣に転態し、それだけの量の社会

的物質的富を支配することになる、ということにあるのです。このように、社会の存続を支える貴重な人間的労働がそれだけ投下されていなくてもかかわらず、実質の無い、いわば「虚構の価値」をあらわす名目だけの価格をもち、この価格で他人に売り渡され、それと同額の、現実の価値結晶である貨幣をその名目的価格の大きさだけ売り手に獲得させるとするのは、客観的にみますと、社会にたいしてなんらの価値をもつ物をも提供することなく、「虚構の」または「擬制的」な「価値」によって社会から一方的に大量の価値を、つまり物的富をまきあげることにはならないと言わなければなりません。そこで、私は、この種の価格にたいしては、擬制的 (Fictitious) な「価値」を示した価格として規定することが肝要であると考え次第です。

擬制的「価値」の商品として、現在きわめて大きな意義をもっているのは、まず第一に土地です。ついでは、株式や債券など、さまざまな形の有価証券があります。しかし、もつとも重大な、いわば決定的な意義をもっているのは、ブルジョア政府によっていくらでもつくりだされる国債をおいてはほかにはありえません。これら特別の商品については、改めて後段の(Ⅱ)で検討を加えることにしたいと思います。

(8) 労働力の商品化と剰余価値

(一)

私的所有にもとづく社会では、私的生産者は、その労働によって生産物・商品をつくり、これを社会に提供して、彼の抽象的人間的労働をその商品の価値にし、この価値の大きさに応じて、自分の必要とする他人の生産物を獲得するということになっていますが、これは、さきにもふれましたが、どんな人間社会でも、社会の存続にとって必要な総労働を各成員が分担して遂行しなければならないという超歴史的な社会的自然法則がこの社会で現実貫徹するさい

の、特別の様式であると言えます。どこでも、人間は、社会の存続を支えるために必要な総労働の一分子を担って労働して必要生産物を生産することによって社会の成員であることを実証しなければなりませんし、またそれを実証することで、その労働に応じた社会から成員として必要な生活物資を分与されるということになっています。しかし、商品生産と商品交換が發展してそこに貨幣商品が生まれてきますと、私的生産者たちは、さきに見ましたように、さまざまな形の競争にいやおうなしに引きこまれ、自分の労働生産物・商品の販売によって得る貨幣では、生産と生活を支えることが困難になり、結局、必要な貨幣を獲得するために、その所有する生産手段を売って無所有となり、残る唯一の資産である労働力を商品として売らなければならないということになってしまいます。こうして、労働力という、まったく特別の商品が大量に生みだされ、売り渡されるということになったものですが、私がここでまったく独特の商品だと申しあげたのは、つぎの二つの理由によるものです。

まず第一に、ふつうの商品は、人間の外部にあって、いわば人間に対立しているもので、人間主体にとってなんらかの欲求を充たしてくれるもの、つまり人間を支えている物的対象でありましたが、今度は、人間にとってではなくて、人間自身のもつ能力そのものが売られるもの、つまり商品になった、ということです。もう一つは、それが商品として持っている使用価値も価値も、ほかの商品には見られない、まったく特別の内容をもっているものである、ということです。この特別の内容については、すぐ後段でその意味が説明されることになっています。

ところで、独立生産者がその生産手段を失って、その担っている人間労働力を商品として売って貨幣を獲得しなければならぬとして、その買い手はどこに在るであろうかということが問われるわけですが、これにたいする答えは、いうまでもなく、わかりきったことで、資本家だということになります。

資本家とは、その所有する貨幣を生産に投下してその価値を増殖させることをその仕事としている人間であって、ただ大量の貨幣を握っているだけの金持とはちがっています。では、資本家はその所有する貨幣を投下して、どうしてその価値を増殖することができるかといえば、それになりたいする正しい答えを導きだすためには、どうしても価値とはなにかということ、とりわけ価値をつくりだすものはなにか、それはどうしてつくりだされるかということの確に把握していることが必要だということになります。私たちは、これらについては、すでに本論稿の「三」の「5」価値概念の「骨格」において、とりわけその「4」価値の実体と価値」のなかでよく学んでいますので、改めて説明をする必要はないと思います。要するに私的生産者による人間労働力の流動により、その抽象的人間的労働が労働生産物・商品に対象化したもの、つまり人間の労働の結晶が商品の価値となるのですから、つづめて言えば、価値をあらたにつくりだすものは人間労働力だけであって、人間労働力以外には価値を生みだすことのできるものは一つもありません、この労働力を流動させて新たに価値をつくりださせなければならぬのですが、どのようにして価値増殖を実現することができるかということが肝心のところです。しかし、この問題も、私たちにとっては、容易にわかることだと言えましょう。

人間労働力というものは、ひとり人間だけがその身体にそなえることのできる精神的能力と肉体的能力とを合せたものを指して言ったものですが、この人間労働力を適当に流動させて労働生産物をつくり出すと、人間労働力を維持するのに必要な生産物・価値よりもはるかに多量の生産物・価値をそこにつくりだすことができます。このような人間労働力だけがもっている特別の才能というものは、人間がこれまでどのような生活してきたかという、簡

単な歴史的事実をかえりみるだけでよくわかります。もし人間が一日に10のものを食べて働き、一日に10のもののしかつukれないとしたならば、人間の生活は、いったい、どうなっていたでしょうか？ おそらくいつまでも「禪ぜん一本」のままで毎日毎日働くことに追われれどおしであったことでしょう。ところが、実際には人間は一日に10のものを食べて、15のものを、いやそれより以上のものをつくりだすことができたのであって、このことは、今日私たちをとりまいているありあまるほどの豊かな生産財、消費財から豪壮なビル、ありとあらゆる交通機関、文化財、等々がどうして出来あがってきたかを考えてみれば、すぐわかります。人間がその人間労働力を適当に流動させ、10のものを食べて10プラス5、10、15、等々のものをつくりだすことができることを、理論的に表現しますと、人間労働力は、その労働力自身の再生産に必要な生産物、つまり必要生産物を越えてそれ以上のもの、つまり剰余生産物をつくりだす天賦の才能をそなえている、ということですが、社会のうちのかなり多数の人々が、すこしも働かないで、しかも贅沢きわまる生活を享受していられるのも、多数の官吏、学者、芸術家、金融業者、等々から、尨大な価値をただ食いつぶすだけの大量の兵器・軍隊にいたるまで、総じて総人口のかなりの割合を占める不生産的人口が平穩に維持されているのは、ひとえに労働力を流動させて社会を支えている生産的労働者階級がつくりだしてくる莫大な剰余生産物があったことなのです。人間労働力がそなえているこの貴重な天賦の才能を的確にとらえ、価値概念とたたく関連づけることによって資本のもとでの価値増殖の秘密を暴露し、こうしてはじめて資本主義的生産の経済諸法則と資本主義社会の経済的運動法則との完全な解明をなしとげることができたひと、それがほかならぬマルクス・エンゲルスであったということは、すでに読者諸君もご存じのところと思えます。

(1)

右に見ましたような人間労働力が本来をなえている天賦の才能というものを心得ていれば、資本家が労働力を商品として買い入れて、どのようにしてその唯一・最大の目的である価値増殖をなしとげることができるかということ、容易に理解されるところとなります。しかし、念のため、そのあらずじを簡単にしておきたいと思ひます。

一人の資本家が五〇〇〇万円の資本を投下してその80%で生産手段（機械・道具、原材料、など）を、20%で労働力を買ひ入れて生産物・商品を生産するとし、事柄を簡単にとらえるために、生産手段は一カ月の終わりに全部消費されつくしてその価値は生産物・商品に移り、総労働力の一カ月分の価格・賃銀を一、〇〇〇万円とし、なお、労働力の支出・消費によって一日につくりだされる生産物・価値が労働力自身の再生産費・価値の二倍、つまり、必要生産物・必要価値と剰余生産物・剰余価値とが同額であるとしますと、一カ月につくりだされる生産物の価値総額は、

$$4,000 \text{ (生産手段の累積分)} + 1,000 \text{ (必要価値)} + 1,000 \text{ (剰余価値)} = 6,000$$

となります。最初投下された五、〇〇〇万円は首尾よく一、〇〇〇万円の増殖をとげましたが、それが労働者によってつくりだされた剰余価値であつて、資本家はそれにたいしては一文の代金も支払わずに、これをままとロハで取得できたものだといふことが、これでよくわかります。資本家は、人間労働力が本来をなえている天賦の才能をたくみに利用して、買い入れた労働力を思う存分働かして、支払つた労働力の価格と同じだけの必要価値の上に、剰余価値をつくりださせて、これをふところに入れたものです。つまり資本の価値増殖は、ひとえに、労働力からの剰余価値の搾取⁽⁹⁾によるものだといふことがはっきりしています。

(9) 「搾取」と言うと、なにか道はずれた不正なことをやっているように聞えますが、しかし、資本家は労働力・商品の価格、つまり賃銀をちゃんと支払ってこれを買入れ、その商品を消費しているのですから、商品の購買者として保障された権利を行使しているだけで、そこには、不正なこと、不法行為はないことになっていきます。この「搾取する」という訳語の原語は、*ausbeuten* (独)、*exploit* (英)、*exploiter* (仏) で、これらはみな、たとえば土地を利用して植物を栽培してそこから収穫物をひきだすというように、ある物の性質をうまく利用してそこからなんらかの方法で利益をひきだすということ、つづめて言えば、利用するということを意味しています。ですから、資本家の場合も、労働力・商品の天賦の性質をたくみに利用してそこから剰余価値を口へひきだしてくるので、剰余価値を搾取すると言われるわけです。ただし、資本家は、ただの商品購買者ではなく、剰余価値を吸い取って太りに太る資本の魂をそのまま体現した利潤欲の奴隷です。労働力をどんなにこき使ってもそこから一円でもより多くの剰余価値を搾り取らずにはいられませんし、そのために、できるだけ安く労働力・商品を買ひ叩くばかりか、労働時間をむやみやたらに延長し、ぎりぎりのところまで労働を強化することに熱中するのがつねです。労働力の使い方は、どうしても、労働力そのものを傷つけ破壊するほどひどいものになっているのが実情です。とくに形だけの「民主主義」の支配しているところでは、この傾向はきわめて根強く、支配的です。ですから、ふつうの「利用」という意味しかもたない外国語にくらべて、ふつうでない、「むりやりの搾り取り」という感じをひとりてにふくんでいる日本語のほうが、実情をより正しく表現していて、より適当なものではないかと、私は考えています。

(三)

資本の存立にとって絶対に必要な人間労働力がどうして商品として売られて好きだけ手に入るようになったかといえ、さきに見ましたように、本来私的に所有する生産手段に結びついてその労働力を働かしていた独立生産者たちが、商品生産と貨幣流通の発展の影響をうけて、その生産手段と労働力との結合による生産物・商品の販売によって、その生産と生活を維持することができなくなり、生産手段を手離し、その担っている唯一の資産である労働力を売ることで、必要な貨幣を手に入れなければならなくなったからです。資本主義以前の独立生産者としては、農民が

圧倒的多数を占めていましたので、右のような独立生産者の賃銀労働者化は、ふつう、独立生産者層の分解・農民層の分解といわれています。この分解の過程は、今日でもなおおきつづいて、目に見えない形で、広く進行しています。しかし、こうした分解の過程は、長い時間をかけて徐々に——独立生産者たちの苦難にみちた没落過程として——進行するもので、むかし資本主義的生産・勃興する初期に資本が必要とする大量の労働力・商品を一時に供給することはできなかったものです。しかし、資本は、徐々に進行する分解過程によって必要労働力が供給されるのをおとなしく待っているというようなものではありません。そもそも、資本がそのはじめにふところに入れている大量の貨幣にしても、「勤儉貯蓄」により長年の労苦で築きあげられたような代物しろものではありません。外では、金銀財宝を求めてそこらじゅうを荒らしまわり、略奪、殺戮から人間（奴隸）売買、等々、ありとあらゆる非道さわるる暴力的方法をつかい、内では、むやみやたらに国債発行、重税まきあげ（このなかには、政商や高利貸による封建領主にたいするべらぼうな高利貸付を通じて勤労農民からまきあげられた血税・年貢の累積もあります）、高率の保護関税、等々、国家権力をとことんまで動員することによって、世界中の無数の勤労人民大衆から力づくでまきあげてしこたまためこんだのが、今日の資本の元祖なのです。これは否定しようのない歴史的事実です。

右のように必要な貨幣・資本の大量製造に力をつくしたブルジョア国家権力のことです。必要不可欠な搾取材料である労働力・商品の製造にどうして手をかさないでいられます。国家権力は、たちまち広範な勤労農民層の上に襲いかかり、軍隊をつかって彼らの家屋敷を焼きはらい、彼らを都市に追い立て、そのむりやり押しつけられた流浪にたいして労働者たちは、烙印、奴隸としての苦役から死刑にいたるまで、国家がきめたさまざまな残虐立法により、ありとあらゆる残忍な懲罰を課され、およそ生きなければ「えんどう豆一皿」の賃銀で驚くほど苛酷・長時間の苦役

を堪えしのばなければならぬという運命をおとなしく甘受するようになるまで、徹底的に焼きをいれられ仕込まなければならぬのです。このような、国家権力を動員して大量の「自由な」労働力・商品を一時につくりだした歴史的過程は、理論的には、資本の本源的（または原始的）蓄積と名づけられ、その典型としては、資本主義の祖国イギリスで十五世紀から十六世紀にかけて広く展開された「囲い込み運動」があげられるのが常です。しかし、イギリス以外のどの資本主義国においても、資本主義社会の成立にあたっては、その具体的な形は違っているものの、どこでも国家権力が先頭に立って強力的収奪をおしすすめる本源的蓄積の過程が展開されなければならなかったことは、争う余地のない歴史的事実です。この日本でも、ご多分にもれず、徳川封建制末期から明治初期にかけて同じ過程が全国的に展開されたことは、周知のところといえましょう。「明治維新」というたいそうりっぱな言葉も、一皮剥ぎますと、その下には、おびただし勤労人民の無惨な苦難と血をもって彩られた大規模な本源的蓄積の過程がひろがっていることを、私たちは銘記しておかなければならないと私は考えます。

(10) マルクスは、その名著『資本論』第一巻七篇「資本の蓄積過程」の末尾を飾る、「いわゆる本源的蓄積」と題された第二章において、イギリスで典型的に展開された本源的蓄積の過程について詳細かつ鮮明な描写を私たちの前にくりひろげていてくれますが、その描写の最後には、右の過程を簡潔に特徴づけたつぎの叙述がおかれています。この叙述は、現代資本主義諸国の国家権力やブルジョア的法律そのものも、その体裁こそ文明化されているとはいえ、その本質は当時とまったく変わらないものだということを教えているものといえます。

「資本主義的生産様式の『永久的自然法則』を解き放ち、労働者と労働諸条件との分離過程を完成し、一方の極では社会の生産手段と生活手段を資本に転化させ、反対の極では民衆を賞銀労働者に、自由な『労働貧民』に、この近代史の作品に、転化させるといふことは、こんなにも骨の折れることだったのである。もしも貨幣は、オジエの言うように、『頬に痣をつけてこの世に生まれてくる』のだとすれば、資本は、頭から爪先ぎまで毛穴という毛穴から血と汚物とをしたたらせながらこの世

に、生まれてくるのである。」（前出、第三三巻、邦訳大月版、九九一ページ、傍点―山本）。

（四）

労働力という商品がそなえている特別の使用価値と、この使用価値を利用しての資本家による剰余価値の搾取については、そのあらまは以上の拙い説明で明らかになったと思いますが、まだ特別の価値というものがあります。さきには、労働者の生活費をもってきた簡単にこれを労働力の再生産費というように説明しましたが、しかし、それではやはり不十分ですので、すこしく説明を加えておかなければと思います。

労働力は、十八歳以上の人間がその身体のうちにもっているもので、労働力を生産するということは、その人間をつくりだすことではありません。すでに労働力をそなえている人間が、労働することでの労働力を消費し、一時その身体から失われたのを、また再びその身体のうちにつくりだすことが、労働力の生産ということです。つまり、労働力を使い果たした人間が、食物・飲料をとり、沐浴、休養、睡眠などによって、その身体を健全な働ける状態にとりもどせば、そこに労働力が生産されたこととなりますから、労働力を生産するために必要な価値というのは、人間の身体を健全な状態に、つまり標準的な精神的能力と肉体的能力の持主に再生産し維持するために必要なさまざまな生活必要物資の価値を合計したものだということになります。

とは申しませんが、労働力の再生産費＝価値については、まだむずかしい問題があります。ふつうの商品の場合には、その商品の生産のために現実に消費された生産手段の価値と労働力の流動によって新たにつくりだされた価値とを合計したものが、すぐそのままその商品の価値となりますが、労働力の生産については、生活手段は実に複雑で、しかもそれらの価値が労働力に移ってゆく仕方もさまざまにちがっています。たとえば、食物ひとつにしても、どん

なもの、とれだけ、標準的に必要なのは、簡単にはわかりません。それらはそれぞれの国の風土や習慣によっても、また歴史的事情によってもいろいろにちがっています。ことにむずかしいのは、精神的能力を維持させ発達させるに必要な生活手段です。新聞、雑誌、テレビ、音楽、文学作品、美術作品、等々について、どこまで、とれだけが標準的に必要であるかは、なかなか判断できません。そのうえ、この再生産費は、人間を標準的な人間として維持し再生産するために必要な標準的費用でなければなりませんから、結婚の費用も葬儀・供養の費用も、その国のそれぞれの習慣によって、その標準的なものを当然に含むのとなります。物的商品の生産の場合とちがって、これらの必要生活手段は、それが消費されて労働力に移ってゆく仕方もさまざまですし、しかも、そうしたさまざまな生活手段がさまざまな形で、さまざまな時期に、さまざまな期間にわたって消費されて、労働力を再生産するわけですから、結局、十八歳以上の人間が平均寿命を全うしてめでたくお墓に入ってから成仏しおわるまでの費用総額と、それに加えて労働力の担い手から労働力が失われたときその労働力をうけついで再生産をつづけることができるよう、後継者をここに労働力の担い手として養成し終えていなければなりませんので、後継者三人（二人では人口減少で社会は亡びてしまいます）を十八歳の労働力の担い手に育成するための費用と配偶者のための労働者本人と同額の費用とが、すべて合計されて、一人の労働者の担っている労働力の価値総額となります。いま平均寿命を満七十七歳とし、説明の便宜上、食物などのように一日毎消費される必要物資の価値合計をa円とし、一カ月毎消費される物資の価値合計をb円、一年毎消費される物資の価値合計をc円、結婚や葬儀などのように一生に一回しか要しないものの価値合計をd円としますと、十八歳から七十七歳までの六〇年間の、労働者一人の労働力の再生産費総額は、つぎのようになります。

$$365 \times 60a + 12 \times 60b + 60c + d$$

これが労働力の再生産費・価値総額ですが、この労働力・商品は、これだけの価値総額をその商品としての販売期間中にすべて補填されなければなりませんから、平均退役年齢を満六〇歳としますと、労働力・商品の販売期間は四年となり、したがって、労働力・商品の一年当りの再生産費つまり年価値は右の総額の $\frac{1}{4}$ に、月価値はその $\frac{1}{12 \times 4}$ に、さらに日価値はその $\frac{1}{365 \times 4}$ となります。これらの年価値、月価値、日価値が、社会の表面では、歪められて労働の価格として、年賃銀、月賃銀、日賃銀として、買手から支払われることになっているわけです。

いささかこみいった説明ですが、これは納得されにくいかも知れませんが、価値概念をたたく適用して労働力・商品の価値を算定する方法が明らかにされたことと思えますし、なによりもその価値額を確定することが至難だということもわかりただけかと思えます。そのうえ、社会の表面では、労働力を売っているのではなくて労働を売っているのだという観念が労働力・商品の売り手自身にもつよく植えつけられていますので、労働力の再生産費を真剣にとらえることはえてしておろそかにされがちです。労働者は労働を売っているので、賃銀は労働の価格だということになりますと、労働者は労働しただけのものを完全に支払われているので、剰余価値の搾取はありえないのだという、資本家にとってお詠え向きの「理論」がまかりとおるようになります。「近代理論経済学」を専門にしている先生がたも、「マルクス経済学者」を標榜しておいでの前先生がたも、賃銀は「労働の対価、報酬」であると宣伝してらっしゃる方々は、いざれ劣らずみな資本家階級のお役に立つために屁理窟をふりまわしておいでとしか申しあげようもありません。なぜならば、労働と値段・お金とは、色と空気とのようにまったく結びつきやうのないものだからです。10 kgのハンマーの一振りという労働と金〇〇円とどういう関係があるか、オシャカさまが逆立ちしてもまったくおわか

りにならないというのに、これらの先生がたは、いったい、どういふ手練手管てれんてくわんでこの二つをうまく結びつけようとするのでしょうか？ 労働者が労働力を売ってそれとひきかえに支払われる賃銀が、なによりもまず労働力の担い手とその家族全員の人間にふさわしい健全な生活を保証する額のものでなければならぬという、まともな人間にとっては自明の真理がちっともおわかりにならないとは、またなんとたいした先生がたでいらっしやることでしょうか！

(9) 資本の全一的支配と人間社会の変質

私的所有のもとで商品生産と貨幣流通とが行なわれ必然的に發展することによって、資本家と賃銀労働者とが生まれ、この資本関係はまた必然的に發展をとげて、資本家階級と賃銀労働者階級という対立する二大階級を基本とする資本主義社会が出来あがりますと、この社会を支える労働生産物の圧倒的大部分は、資本によって生産されることになり、生産部面でのこの資本の支配は必ず拡がって、社会生活のあらゆる部面にわたって、ひろく資本が支配するようになります。

資本にとって生産物の生産は、ただ価値増殖のためだけですから、儲けが大きければなんでも生産しますが、儲けらなければ、必要な物でも生産しません。儲かるとなれば、害毒を流すのがわかっている物品でも、どしどし生産して売り出します。消費者の大半を占める勤労人民大衆にとっては、選択の余地はなく資本がつくって与える物品を買わなければなりません。資本にとっては、儲けが多ければ、環境破壊などは平ちゃら、騒音、大気汚染、自然破壊など、こたえられない儲けをふところにいれるための事業の当然の副産物と心得ています。精神的・文化的部面も完全に資本の支配するところで、人間を傷つけ、墮落させるような出版物、映画、娯楽施設など、資本の手で数限りなくつくりだされます。教育機関を動かしているのも資本、医療機関も資本にとっては価値増殖の場ではなく、そこで

は、人間は価値増殖のための必要な「商品」扱いに堪えなければなりません。もちろん、ここでは政治を動かすのも資本、それもきわめて大きな独占的大資本が握っていることは、周知のところでは、政府は独占的大資本の利益増進のための道具であって、そのために動かなければならず、それに役立たくなればすぐお払い箱になるのも、よく知られています。⁽¹¹⁾

(11) マルクスが、その有名な遺稿、『経済学批判への序説』のなかで、

「資本はブルジョア社会のいっさいを支配する経済力である。資本が出发点にも終点にもならなければならない」（マルクス・エンゲルス全集、第一三巻、邦訳大月版、六三四ページ）

と述べていることは、専門家のあいだではよく知られています。この言葉は、「経済学の方法」と題されたその「3」小節の中に見出されるもので、そこで問題にされているのは、もっぱら経済理論体系のあり方です。しかし、マルクスのこの指摘は、経済理論の領域を越えて、それよりもはるかに広い分野をその射程の中に収めているものだといわなくてはなりません。政治、経済、文化、等々、社会生活のあらゆる分野で生起する重要な事象の本質を正確に洞察することは、この視点を振りどころとしてはじめて可能であると、私は理解していますし、レーニンの名著『資本主義の最高の段階としての帝国主義』もこのことを裏書きしているものと考えられます。

もともと人間社会は、人間が主人公であって、すべての人間が、その担っている精神的能力と肉体的能力を発達させ、これを適当に流動させることによって真に人間社会の名にふさわしい健全な社会として、築きあげられたものでなければならぬことは、もとより理の当然であります。ところが、この資本主義社会では、主人公として支配を誇っているのは、ほかならぬ死んだ資本であり、とりわけ大資本であり、利殖の奴隷である資本家も、賃銀労働者である賃銀労働者も、その他の人々も、もれなく資本の命ずるままに動かされ、ふりまわされ、資本に奉仕するかぎり生き長らえることを認められるというのが、ありのままの実情です。人間にふさわしい生活がますます困難になり、い

やおうなしに動物以下の生き方を送ることを強いられる社会、そして、これら数えきれないほど多数の人間の堪えがたい苦難と犠牲の上にあぐらをかいてぬくぬくと太りに太ってゆく大資本——これこそが、「もっとも発達した資本主義社会」と称される現代資本主義社会の真の姿でなくてなんでしょう。このような人間社会の驚異的な変質と腐朽こそは、資本の全一的支配の必然的な結果であり、その産物にはかならないのです。

さきにこの論稿の「(6) 価値の結晶としての貨幣の全能」のなかで、私は、人間自身の労働の対象化である商品価値が貨幣の形をとって独立化することによって、この価値の結晶そのものが、どんな物質的富をも、社会的地位も名誉も美も貴も、なんでも思いのままに自由にすることができるといふ、貨幣の全能を、そしてまたすべての人間の貨幣への隷属・拝跪を、明らかにしました。そこでは、全能の貨幣をつかってあらゆるものを手に入れ自由に行うことができる主体は、死んだ貨幣そのものではなく、この貨幣を所有する生きた人間であつたのです。死んだ貨幣は、もっぱらその所有者である人間主体のためにその全能を発揮したというわけです。

ところが、その貨幣が運動して自己増殖をとげる資本に転化しますと、生きた人間と資本としての貨幣との関係は逆転して、始めから終わりまで完全に人間を駆使するのは資本そのものになつたのです。生きた人間は、その一挙手一投足にいたるまで、資本の命ずるままに動かなければならない、生きたロボットに成りかわつたものです。そして、資本主義的生産の必然的發展に伴つて、少数の大資本による多数の中小資本の収奪がおしすすめられ、その結果きわめて少数の独占的大資本が、社会生活の全分野にわたつて完全な専制支配の体制をうちたてることになり、これによって人間社会がいよいよますます急速にその変質と腐朽の度合いを救いがたいまでに深めていつているということも、読者諸君のよく知っていられるところと思います。

いまから一世紀半以上もむかし、勃興途上にあつた資本主義国フランスに生きたサン・シモンとフーリエとは、はやくも右のような変質と腐朽の実態を見破つて、この上もなく辛辣で的確な批判を公けにしましたが、それによつて、この二人は——かのロバート・オーエンとならんで——天才的な空想的社会主義者という、不朽の名譽を担つてながく歴史にその名をとどめるようになりました。ところが、どうでしょう、マルクス・エンゲルスがうちたてた科学的社会主義の理論など真面目に学習することもせず、もっぱら「自分たちの理論的立場は科学的社会主義である」といった空宣伝ばかりふりまいている自称「前衛党」の「指導者」たちは、「空想的社会主義などというものは取るに足りないものだ」などと言つてこれを見下していながら、口を開けば、独占的大資本が専制支配を布いているこの帝国主義国をとらえて、「ここでは自由、平等、民主主義がちゃんと保障されている。だから、勤労人民はこれを十二分に利用して国会で平和裡に多数を制して国家権力を掌握することに力をつくさなければならぬのだ」といった宣伝に大童おわらわての態です。もし、かのサン・レモンとフーリエが再び生き返つてこの実態を目のあたりに見たとすれば、大資本の専制支配が生みだす人間社会の変質と腐朽のいっそうの深化がこのようなありうべからざる錯覚や妄想を生みだすまでにすんだことに感嘆のあまり、しばし言うべき言葉も知らなかつたであろうと想像されるのですが、読者諸君は、これについてどのようにお考えでしょうか？

(10) 擬制的「価値」による強力的収奪

さきに本論稿の「(7) 価格形態の特質」の(ロ)において、価値と価格との「質的矛盾」を説明しましたが、そのさい、価値をまったくもたない物が名目だけの価格をもつこと、この名目だけの価格で売られてそれだけの現実の価値＝貨幣を販売者が獲得することは、いわば、擬制的「価値」をもつて現実的価値をまきあげingことを意味するものだとい

うことを明らかにし、その代表的な例として、株式、社債などの有価証券、土地および国債を挙げておきました。そのさい、これらのものの演ずる重要な役割についてはこの(四)で説明されるはずと申してありますので、以下で簡単にそれらの特徴について述べることにします。

今日の日本では異常な投機熱が支配してそのために事柄をよく見究めることがむずかしくなっていますので、まず一応投機という要因を捨象して考えますと、株式は配当を、社債と国債とは確定利子を、そして土地は地代を、それぞれの所有者にもたらすものです。この資本の支配する社会では、すべてその所有者にたいして定期的にある一定額の貨幣収入をもたらす物は、定期的に利子を生む貨幣資本と利子生み資本と同じものと見なされて、たとえば、市場利子率が年五％のとき、年に五〇〇〇円の確定利子を定期的にその所有者にもたらす物または権利名儀、たとえば債券は、その市場利子率をもって利子を除すること——このやりかたを「資本還元する」と言います——によって、その年五％の利子が五〇〇〇円になる利子生み資本、つまり一〇、〇〇〇円の価値の貨幣資本と同じ括弧つきの「価値」をもっている「資本」として社会的に通用することになります。いま一〇、〇〇〇円の貨幣を所有している人は、それを利子生み資本として他人に貸付けても、またそれで右の債券を買い入れても、それによって彼の得る定期的収入はまったく同じです。このように、定期的収入を資本還元してその所有名儀の価格を算定するということは、発達した資本主義国で、資本のうちでも利子生み資本が比較的にもっとも決定的な意義と役割をもつことになったことの一つの現われといえます。

ですから、まず一般的・基本的には、以上にあげたものはみな、そのもたらす貨幣収入をそのときどきの市場利子率で資本還元することにより算定された額の名目的価格をもつことになります。ということは、一般的には、市場利

子率が上がればこれらの名目的価格は下がり、市場利子率が下がればそれらの名目的価格、つまり括弧つきの擬制的「価値」はふくれ上がるわけです。市場利子率を基本的に規定するのは、中央銀行の公定割引歩合ですから、政府の指示のもとにこれを切り下げれば、証券類も土地もことごとくその価格が騰貴し、銀行その他の金融業者から証券取引業者、サラ金業者などにいたるまで、こたえられない儲けをふところにいれることとなりますし、わずかの利子だけを頼りにしている貨幣蓄蔵者たちは、より有利な投資を探し求めることになり、とどのつまり詐欺師どもにまぎあげられることが頻発するようにもなります。利子率の引き下げは一般に投機を煽って、とりわけ土地価格の昂騰を煽り、また株式投機を一段と強め、株価の異常な騰貴を誘発します。つまり、括弧つきの擬制的「価値」を大量に作りだし、これが現実の貨幣価値に転化してすでに生産されて一定の価値総量をもっている総生産物・国民的富の購買に向けられるわけですから、これらの生産物・商品の価格は必然的に、その価値額を越えて異常な騰貴がひきおこされることになるわけです。こうした価格騰貴、つまりインフレは、独占・金融資本にとっては、きわめて好ましいもの、だということ、私たちはよくよく心に留めておく必要があります。

以上は、括弧つきの「商品」のすべてに共通する価格規定についての、いわば一般的法則ともいうべきものの説明ですので、つぎにそれぞれの「商品」の特徴について簡単に見ておきたいと思えます。

まず株式、社債については、それがつくりだされるに当っては、現実には一定の価値額・貨幣が払いこまれていること、そしてそれらを所有することによって生ずる配当や利子といった、一定の定期的貨幣収入は、本来はさきに払い込まれた価値額が資本として機能することによってあらたに生みだされた現実の剰余価値の分化したものだということを見ておかなければなりません。（もちろん、こういう本来の性格をそなえていない、まったくの擬制的「価値」

にもとづいてつくりあげられた株式も多々あることは、いうまでもありません。ですから、それらの場合には、その価格は名目だけの価格、つまり擬制的「価値」をあらわすものではありませんが、それがために一方的なまきあげ・収奪が行なわれるものだと言ふことはできないと考えられます。株式価格は、投機によりはげしく変動するのがつねで、そのために高額な利得・損失が必然的に生じますが、それによって収奪を受けるのは、一般勤労人民ではなく、その利得を求めて貨幣を投下する特定の貨幣蓄蔵者や資本家に限られています。勤労人民は、これらへの貨幣投下を強制されてはいませんから、株価暴騰によるインフレ昂進の影響は受けるとしても、これらの価格騰貴そのものによって直接に収奪をうけることはありませんと考えられます。これに反して、ひろく一般勤労人民が直接にも間接にもあこぎな収奪をむりやり受けるのは、土地であり、とりわけ国債であります。

土地は、人間が生活するためにも経済的活動その他の仕事をするためにも無くてはならない場であります。しかし、それらのために適当した土地はきわめて限られていますので、これを私的に独占する者は、いくらでもその価格を吊り上げることができ、生活の場の確保に苦勞している勤労人民の乏しいふところから、いくらでもまきあげることができます。今日のようなインフレ最盛期には、土地の「ころがし屋」なるものが繁昌して、べらぼうな土地価格が人為的につくりだされ、一般勤労人民を堪えがたい困窮におとし入れ、金融業者への「債務奴隸」が大量につくりだされています。私的所有にもとづく社会では、こうした私的独占によって、社会を支えている労働力の担い手たちからほしいままの収奪を行なうことが保証されているのですし、また、こうした土地価格の暴騰は、銀行その他の金融業者にこたえられない利得を保証するとともに、土地課税引き上げによる国庫収入増加という国家権力にとっての申し分のない利得をおおのずからもたらすものとなっています。こうしてなんらの価値をも投下することなく、い

ささかも苦勞することもなく、こたえられない利得をいつまでも生みだして下さるありがたい土地価格の昂騰です。利得にありついているさまざまな機関・階層から国家権力機関のお偉い皆様がたにいたるまで、どうしてこれを阻止するために骨を折ることがありましようか？

しかし土地は、私的所有にもとづく資本主義社会でこそ、必然的に擬制的「価値」の商品となり、金儲けの亡者ども、利潤欲の奴隷たちによる巨額の価値の収奪を保証する社会的機能を果すものですが、それは、本来人間の生活の場を支える土台として不可欠の根本条件となっているものです。これが強力的収奪の手だてになっているからと言って、この土地そのものを廃棄することはできませんし、それでは人間がその上に立っている足場を切り捨てることになってしまいます。要は、土地が商品として右のような強力的収奪を果すという社会的性質をもつことになるその社会的根拠を見究めて、その社会的根拠を根本的に除去することこそが肝要なのです。そのために、私的所有という生産関係を除去し資本の支配する体制をすっかりつくりかえてしまわなければだめだということは、容易に理解されるところといえましよう。

しかし、なんと申しましても、もっともむきだしのもっともあこぎな強力的収奪をはたすものとして挙げられなければならぬのは、まさしく国債です。それは、株式や社債のように、一定の価値額の投下を必要としてそれにもとづいてつくりだされるものでもなく、また土地のように働く人間にとって絶対緊要な自然的性質をそなえているものでもありません。それどころか、それは一円の価値投下をも必要とせず、また一円の価値投下すら反映したものでなく、まさに打出の小槌そのままに、ただうち振りさえすれば、つまり、金額数字を印刷した紙切れをつくりださえすれば、その数字はたちまち商品価格として現実の価値・貨幣額をあらわすものに化けてしまい、こうして国家

権力の手で、まさに口ハで、こしらえあげられた擬制的「価値」の転化した巨額の貨幣資金が、国家権力をあやつる支配階級の手し、さまざま方法と形をとって流れこんでゆき、こたえられようもない利潤を保証してくれるものなるのです。しかも、それは、それだけにとどまらず、擬制的「価値」の製造によってひねりだされた巨額の貨幣額は、適当な間をおいて、人々の忘れたところに、同じ国家権力の手で、勤労人民を主とする国民のふところから、租税の形で、強力的に、有無を言わせず、まきあげられて、まんまと帳尻が合わされてしまうという仕組みになっているものなのです。

巨額の国債発行がそのまま独占的大銀行のふところに勞せずして高額の利益をもたらすものとなるばかりでなく、ひろく金融業者のふところを肥やすものになること、また、そこにひねりだされた莫大な現実の価値・貨幣額が「誘い水」とも「回生の水」ともなつて、独占的大資本とこれにつながるすべての資本につきない利潤を生みだすものなること——これらのことは、勤労者にはすでによくわかっているところですし、右の当事者たちがごぞつて告白しているところでもあります。

一方の資本家階級にとつては、一円の価値をかける必要もなく、しかもこたえられない儲け・利潤をば、「ひとりでに」いつまでも、こんこんと湧き出してくる泉、だがまた、労働力を担つて社会を支えている勤労人民にとつては、その汗と膏あぶらと血の搾取という苦難と犠牲とをつきることなく、ますます大量に生みだしてやまない泉——これこそが、国債の眞の姿です。国債こそは、まさしく、擬制的「価値」による強力的収奪のもつとも悪質でもつとも陰險・狡猾な元凶といわなければなりません。

ですから、この国債がこの世から残らず消し去られ葬られてしまえば、右の泉は完全に涸れはてて、勤労人民大衆

はそれが生みだす苦難や犠牲からそれだけ解放されることは確実です。かつて、ロシア革命に勝利したソヴェト・ロシアが帝制ロシアの製造した国債をすべて反古にしたのは、社会主義を旨とする権力としては、当然の任務でもあったのです。

さて、以上見てきましたように、擬制的「価値」の果す役割が絶大であることを知るにつけ、私たちは、価値概念の確・厳密な把握がどんなに重大な、決定的ともいえる意義をもっているかということをも、ひしひしと痛感しないではいられません。なぜならば、価値概念の厳密・正確な把握にもとづいて、はじめて、価格形態の特質も、擬制的「価値」による強力的収奪の実態をもただしく理解することができるからです。このことなくして、どうして、この資本主義社会で私たちの生活を完全に支配し、その生き方すべてをも左右している擬制的「価値」をもつ「商品」の本質をとらえることができましょう。

「経世済民」の学問と称される経済学の分野で、価値とか価格とかについての抽象的な「理論」を、きわめて詳細かつ深遠に展開していらつしやる向きも少なくないようですが、それらの「理論」の専門家たちのなかで、はたして、擬制的「価値」による強力的収奪の実態をとりあげその「理論」を適用してその階級の本質を暴露し、すすんでその強力的収奪の根元を断ち切るという焦眉の課題をとりあげ、その真剣な究明に努めようとしている方々が、いったい、どのくらい、いらつしやるでしょうか？ 経済学にたずさわっているほどの人間は、私自身をもふくめて、やはり、このような点を、いま、深刻に反省すべきときではないかと、私は考えるものです。

さてこれまでこの拙論によって、価値概念の基本的内容について、その大要をあらまし明らかにできたのではないかと思いますので、これからは、これまでの拙い論究の成果をふまえて、それをいわば適用することをこころみ、そ

れによってもう一度その成果に吟味を加えると同時に、価値概念の広がりと深さというものをよりいっそう的確に把握することに役立てたいと考えている次第です。これからとりあげられます「四」から「七」までの主題は、いずれもそのような適用とよりいっそうの深化とのためにとりあげられたものだということを、ここであらかじめ申しあげておきたいと思えます。

(未完)

(一九八七・四・三)